

漢法苞徳塾資料	No. 503
区分	病因
タイトル	ツボと五行と病因
著者	八木素萌
作成日	『医黄集門』第23号 1994

先日ある所で、大部分の方が新人鍼灸師という集まりで、「ツボの五行配当」について、話をする機会に恵まれました。その時の概要と質疑応答の一部を紹介させていただきます。

一、

ツボの五行配当ということの意味には、極めて高い臨床的、実践的な価値があるものです。病因論・治療論と緊密なものですから、臨床成績をあげようと思うなら、「陰陽五行論」に対する評価・好悪は別として、しっかりと覚えて欲しいものと思います。

五兪穴（要穴であり、手足の井榮兪経合の五種類のツボ）の主治症と言うのは、少なくとも、国家試験対策用には、皆さんよく御存知です。これは、適切に用いると大変効果的なツボです。

『難経』の「四十九難」「七十四難」他のいくつかの「難」の記述は、病因の五行性は生理的機能の五行性として表現されているし、また、病因の五行性は生理的機能（集合概念としての五臓）の五行性を媒介に表現されるものである、という認識を示しています。

五行穴をそれぞれについて、見てみましょう。井木穴の「心下満」という主治症は、のちには胸脇苦満といわれている症候です。肝一木の症候は、筋の異常、眼や涙の異常、口に苦みが出る、アレルギー的に過敏になるなど、実に多面的な症候がありますが、それが「肝一木」の病なら必ず「心下満」を見せています。これには「木」性の経・穴の治療が、治療的な経絡、経穴の運用の軸になります。榮火穴の主治する「身熱ヲ主ドル」の身熱というものは、暑・熱の病証であると共に、また、心の病証です。「心一火」の病候も実は多彩なものですが、やはり、それらの病候を集約し収斂し圧縮して表現すれば、このように言うのが適切です。兪土穴では「体重節痛ヲ主ドル」とされます。この「体重節痛」というのは「脾一土」の症候です。経金穴の「喘咳・寒熱スルヲ主ドル」は、「肺一金」の症候を「喘咳寒熱スル」とした要約です。合水穴の「逆気シテ泄スヲ主ドル」の症候記述は、まさに「腎一水」（膀胱も含み、機能集合論としての五臓の名の一つとしての腎・水です）の症候の集約・収斂された表現です。

外邪は六淫といわれ、風・暑熱（火）・湿や飲食労倦・燥（傷寒）・寒（難経では湿というが全体をよく読むと冰瀑の冷寒さであることが判る）ですが、次のように、五行配当されています。風＝木、暑・熱＝火、湿（飲食労倦も）＝土、燥（難経では傷寒となっている、注意深く読むと、乾燥した寒気で、肺を冒す性質をもった邪として把えていることが判る）＝金、寒（難経では湿と表現しているが季夏の気を表現した湿とは全く異なる記述であり、下から〈地面の側から〉体を犯す水

瀑、冷たく湿った冰冷さ邪として把握されていることが判る）＝水です。この五行穴（五俞穴）の主治症を知り、病邪の五行は、身体機能の五行の症候として表現されることを知っていれば、五俞穴を臨床において意識的に運用することによって、このことの重要さが体得されるものです。

類は友を呼ぶと申しますが、木性の病因は身体の木性の機能を介して現れる形で表現されます。別に俗な言い方をすれば「木は木に仲がいい」のです。木性の身体機能と云えば、筋であり、眼であり、肝（胆も含めて）であります。木性の邪にやられると項背や筋などに異常、異和が出やすい。涙が出やすい。眼の異常や、口が苦くなる。などなどのような病症を見せますが、必ず「心下満」つまり後には胸脇苦満と言われるようになった症候をあらわすことは、良く知られております。

火性の邪と云えば「暑」邪・「熱」邪です。これは、「身熱」という症候を軸とした多彩な症候（例えば咽乾や喉燥など）を現わす邪です。そしてこういう症候は、「心一火」の症候であるし、このような熱病症の治療には「火」経・「相火」経・「気血トモニ盛」んな経の経穴（火穴、陰経では火、陽経では水）が用いられるのは良く知られています。

関連することで、少し脱線しますが、「痛」みの症候の時にも、「火」経、「火」穴の運用は大事とされて良く用いられます。『素問』「拳痛論第 39」や「痺論第 43」「痿論第 44」、また『靈樞』「論痛第 53」や「周痺第 27」などのような「痛」みの病症を中心的に論じている篇を読むと、「痛み」の大部分が「寒え」によって気血が滞って生じるものであり、残りは「熱」によるものと考えており、また「風・寒・湿」が混ざり合っただけで身体を犯している為に起こっている症候であると考えることが判ります。「熱」を与えたり奪ったりする上で、「火経」「火穴」が便利なものであるという認識があるからなのです。

土性の邪とされているものには「湿」（季夏の季節の気）とするものと「飲食労倦」とするものがあります。いずれも症候としては「体重節痛」として要約して表現できる症候を見せます。これは「土性の経」「土性の穴」（陽経では兪木穴）の症候であり、また土性の経、土穴は治療的な運用の軸となるものです。

金性の邪については「空気が乾燥して寒い」ので、それが邪となって肺が冒されやすいものである、と言う点が大切です。『難経』では「傷寒」と言い、『内経』では主に「燥」と言いますが、カラカラの風が肺を傷めるのだ、そういう邪のことだと、両者を統合して解釈した方が臨床の実際に適うものだと思います。つまり「金」邪は「金」臓（臓・腑・経絡）の症候をあらわし、治療するのも「金」の経絡・経穴が治療的な運用の軸となるものです。

水性の邪としいのは「下から犯す氷湿冷寒な邪」のことです。この邪にやられると「寒えのぼせる」（つまり逆気）症候や、二便の異状や「寒や汗」が出やすいという症候など、多彩な病候を現わします。下部から身体を侵襲する病邪は水性のものですが、水性の臓腑経絡の異常症候として表現されます。そして、この症候の場合には「水」経、「水」穴の運用が、治療の軸となります。

御注意願いたいのは、ここに言っている五臓と言うのは、多様な身体機能に五行をあてはめた場合の集約表現であるということです。言いかえると、多岐多彩な生理的現象や機能を五行的に分類認

識したものの「代名詞」としての五臓名であるということ、又は、多面的な生理機能を、五臓の名を用いて集合論的に整理したものであるのです。解剖生理学的に見た空間的構造を把えた表現として五臓の名が用いられているものではないという点が、大切なことなのです。機能を主として見る東洋医学的な概念表現の特質と、解剖生理学的な把握を混同すると、混乱して理解しにくくなるということを強調しておかなければならないと思うのです。

二.

おおよそ以上のような話をして、質疑を受けて応答しました。

最近、なかなか質問してくれませんかので話をする側としては、甚だハリ合いのない「ヌカに釘」と言われるサクサクとした思いをさせられる事が多いのです。この事がある程度覚悟しておいて、質問を引き出す工夫をしていなければならないようです。マニュアル人間、分かり易く図式的に表現されマンガのように親しみ易いことが、求められているのかと、思うことが少なくありません。

マニュアル的でマンガ的な、単純図式では「宇宙」にも比べている人の生命、人の身体、人の病気に対応できる、本当の知識や技術は伝わるのでしょうか？と少々アヤブム思いでいます。

質問の中でも、私の関心を強くとらえた問題がありますので、その応答部分を主として記入しておきます。

問……陰陽五行論なんて古臭い荒唐無稽なもので、医療とは何の縁もないと思いますが？

答……そう思う人は、すぐに鍼灸の世界から離れた方が良いでしょう。何故かと言いますと「体表」を詳細に観察して体内の状態を推測したり、体表を用いて系統的に治療的に関与して行く、という明白な立場が、現代の西洋医学には見られないのです。つまり鍼灸的に体を診て鍼灸的に治療するという立場がないからです。陰陽五行論は古代哲学で荒唐無稽なものであるから、それによって身体を考え、治療を考えるのは変である、それに「経絡」や「ツボ」は実証された訳でもないからと宣伝する人たちがいます。ある人は中国医学書を翻訳して稼いでいますし、又ある人は、自分たちが否定している経絡や経穴を用いています。チャッカリしたものと言えますし「自家撞着」そのものです。

陰陽五行論をそういう具合に把えるのは、その人の自由ですが、鍼灸臨床の成績を高いものにしたい、もっと鍼灸医学を知りたいと思われる方々は、最悪の場合であっても、方便としてとらえても構いませんから、陰陽五行論をキチンと理解して運用してほしい、大変奥行き深いものですから勉強して欲しいものです。

問……圧痛点、反応点を探して刺してやれば治っていくものではありませんか？

答……何故圧痛点を治療に使うのか？について、何か良い説明があるのでしょうか？私の知る限り、

そういう事を説明した本は見当たりません。圧痛が何故生じるか、圧痛には四種類のものがあるなどを記述したものなら知っております。また「刺す」と言っておりますが、トニカク刺すのでしょうか？どのように刺すべきかこそが問題ではありませんか！ですから、ご質問には答えようがないと言うほかありません。

ただ私の知っている事実は、初歩の内には、圧痛点に、太めの刺し易い鍼で、これでもか、これでもかという具合に、深く強く刺していた人が、経験を重ね勉強が進んでくると、大方の場合、細い鍼で浅く刺しツボは最小限にして気持ちが良いと感じられる、やさしい治療に変わっていると言うことです。こういう具合に変わっていった人達に、私は、症候が悪化したり、時には救急車を頼もうかと思う程の反応に出会ったりしませんでしたか？と質問しました。冷や汗をかいたことは結構あります。何かとかんとかおさまりをつけることが出来たのは幸運なのでしょう。こんな経験があるからこそ、どうしたら、そんな失敗を冒さなくてすむのかと、真剣に考えましたというのが答えでした。

たしかにある流派の人達は、鍼は太いし（五～七番）深く刺すし、満身に響き渡るような鍼響を重視しております。然し、こういう流派の人達に治療を受けると、一見豪放な刺し方のように見えても、「鍼先に目を付けている」という表現にピッタリの極めて巧緻繊細なやり方で、鍼響もビックリして飛び上がるというテイのものでもありません。

問……鍼治療を受けに来るのは大部分は運動器の痛みや凝りを訴えて、それが治れば良いと考えています。ですから、運動器の痛みや凝りに対応できる治療で十分だと思います。また、私の友人には、今はストレス社会・高齢化社会ですから「慰安マッサージ」的な鍼治療で十分ではないかと考えているものもおります。そういう事についてはどうですか？

答……「気持ちが良いくて、ウトウトしました。ああ軽くなってサッパリしました」と言われることを目的にした治療はどうしたら良いかという趣旨の質問なら、答えは簡単明瞭です。刺さない鍼具を用いて、全身的に、経絡の流注の順に撫擦してやる。或いは温める用具を使いながらそのようにしてやるので十分です。二十分もあれば、周身二回はやってあげられます。

ストレス学説を唱えたセリエと並ぶ巨峰でホメオスタシス学説の創始者でもあるキャノンの著書の中に、ストレスというのは、それを受けた者にとっては、そこから逃げ出したいか、或いは闘って克服したいもので、交感神経の緊張状態を強くします。逃げ出す、闘うに好都合な身体の状態になっているのです。それが目的を達せられないと筋の異常緊張症状をあらわす、という事がありました。ですから、身の凝りを具体的に見つけて、それを解きほぐしてやり、交感神経の緊張を除いてやる、体のバランスを整えてやるという点では『経絡治療』がもっとも得意としていますから、それをやってあげれば良いと思うのです。

現代医学でも「痛み」は最も基本的なバイタルサインとして考えられています。それには必ず何らかの身の異常が隠されているものなのです。ですから「痛み」や「凝り」の治療は実

は大変なことなのです。「肩こりに始まって肩こりに終わる」と鍼灸治療が表現されますが、古典の立場から見ましても、五臓六腑経絡の病候の中の重要なものとして痛みが扱われています。ですから運動器の疾患で痛みを緩解させれば、鍼灸治療の役割は十分に果たしているのだと考えるのは危険な、安易な理解であると思います。

やはり、病因を知り、病位（臓腑や経絡など）を知り、経絡の流注や病理生理主治症を知り、補瀉を選ぶ原則に誤りがないようにし、正しい配穴が行われ、手技の選択が適切であるようにする、病症を知り診断学の理と術に通じることが重要でしょう。口でこのように言うのは易しいのですが、実際に身につけて自由自在に運用できるようになるというのは大変なことで、鍼灸学校で習うのは「ホンの入り口」なのです。

「痛み」の治療が上手であるというのは、実は一朝一夕にして出来上がるものではありません。漢法医学と手技手法に通じていけば通じているに従って治療成績は向上していくものです。

「慰安的」鍼灸を唱えるのは、治療的なことではなく、営業的な方便ではないかと思います。それならそれで一理も二理もあるものでしょう。しかし、医学としての鍼灸術をそのように卑下して低水準な評価に甘んじるようなことなら、論外の論外です。

三.

他にもいろいろと質問されてお答えしました。また、ここに論じていることも意を尽くしてはいませんが、この辺で筆を擱きます。ここでの論に関係の深いことは『医黄集門』の前号（22号）にも述べましたので、参考になさって下さい。

以上